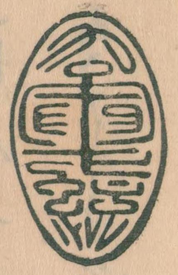
863
168

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』 請求記号 863-168

ガラス使用

八六三ー一六六



国立国会図書館　タイトル『しをり萩』 請求記号 863-168

ガラス使用

あらにそつ川おそ法に、嘯きるてとは志れく
物の本情にかなつり志られに 範正 孫
大坤法師の草しおくれ蓮華直指の
冊一帖お家人の望申に之しくこれ
おりしを傳へこけしより二さい正風の
血脈なさいかり三さい吾師 蕪屋蕪に
脈慶せられてまれし一法小路なかれ
くさる道の傳統を挑るまで いまんを

むつきりかれしこれ貴な慕るまで
需ましてう 統に擧り 拓すしく
葉門を設ず 老道導早入洋とも
くや三千の徒を示し 五千の門葉な
教ふれの身をかくまを 殆世孫
をかりこしきなれ事なり
志とし 明和七年三月 みちのく 此道
が考るな分ケ見んと思ひさゝるより

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』 請求記号 863-168
ガラス使用

去川は今や田独の翫ふ風流をなす川
かしこ汲尽しに細経の力を撰んし
浅瀬の沼はおほかりしかえかしおほれつゝ
道の冥窓を冥にいる都中のしるは
眼に層は徒然志せんとなしかくこ
諸かしの餘竹を傳しやくもなし一部の
まし免に筆まり撰道まるの墨宝を
かゝらは佳章を拾ひて山川集ア那

風流を著く中原の平見に追はまんと
おほしに縫中きて撰物の数篇かくらさに
一と巻の諸ア刷ましくそて甲乙
氏をそこらにこちからも
統てり号て挿そ　三の清那し
こ披きなりし諸八冊より十一川境乃
人ゝしなき川なく風雅の作ぶまふ
やうに金葉のちらひを永く後集に

編ことゝかんとて新しく年をそめ
まれものを椎下周をかし

北

年和

むかしされためしあり俳諧の
笑はしきを名てその関の名にて立れ
吾師事しめられかなにさめ
そにおよ風を子の入り祝ものあるし

一 詩の囊 [illegible]

歌れぬるうちハ是も笑に
かへてむ為憲の袋ハ言ふれ

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』 請求記号 863-168
ガラス使用

一 菅 簀 一 組

おもひ都路のえにしなる孫に富
かりしゆの金波よりてそりそへられて
武夷の雪を遠さしむかの芰菰の
十尋ばかりなく ぬハ名ぬなるに

一 二見の画方 一 本

例の有實なりとも

一 麦粉 一 帋

寸馬懷にしまり咩て曰むし西上人の
たのしけれ麦粉ハ凡に吹ひれ
きよさめの井れ名をこゝの処
かくけれ大夫凡なかこちなりしせず
菓飯一時の飢ハ志のきも活ふるめかの
中將の乾飯の數ひにやおら華て

一 碁笥椀 一 具

雄路の宮屋波おれて諸葉に肱を曲ん
よりこれ嫌せく拔ともなさんなりてむ
板の小口切ふそ 増りく目おさし
穴しこ惟然坊かつ嫌りの海ふそ
おしれ

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』 請求記号 863-168
ガラス使用

一丈川の書　一帖

一古今の校出

夏の細道

おくの細道をこゝ経回にそれぞれを補し
ゑ事其所をておもむかしらせて
やらんに苔の入て僕等りしひくて
ふるせしのし吟味盆池の鍾の湖を
志るを今驥尾あり
蒼蠅におとれり

昨和寅寅季春

桃杷園
支朗

鴎巣亭
都貢

深生中れ今日神廟を
よろはひおれに漸暁の
空より旅心さまより姉に
千里玉岡の情踏切く
あく世を

朝鶯や雲にあらぬの旅れ涂　暮雨巷　暁臺

歌僊行

師々を拝の業問り諸君を
返めく文臺を守れ

明蒼も頭（トサシ）に蓬（ヲハ）生せしな　支朗

南かせく安身ふれ浮雲　暁臺

打て　のく跡に田舘の時にまて　丈州

掃葉ゝ古を続き　晩を跡し　萬岱

夜もすがら月れ都をなりしを　菊居

下略

歌仙行

あとしきて宮につきて市も春りの
心いそ貴より師より十日お杖を先に
江都にむかえん事を行せ

日黒を出せりかえて待月に　斗拙
関のおりしに霞砂をや　暁臺
わだらぬ庵の額のさひしくて　亜満
いまをしら蓼(キ)れん野明れ月　漁山
卅秋を蓬りおしみて上に達部　友之

這ひよかし以とし　鉢　魚邨
疲(ウ)・黒く鞭鞭を掃を吟ひおくて　能一(勾當)
咄し臺ふゝ古里　宋湖
むらえも真帆に水さまれ漁戸の居　蔓丈
こほれて仕迎ふ暁の星　素十
呼をやめて聲(ウブ)家の音を延し　昨吾
焚人を巻く風呂に首さけ　文艸

下略

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』　請求記号 863-168
ガラス使用

かりもに立て花や茅りいくなり見　亜満

晴かまし本地にも芽れ出る時　友之

雲に鳥引も帰るも軒毎し身　昨吾

秋風ありまゝ房のワクれ汁　蔓丈

[illegible]

[illegible]　萬岱

東武へ先立て

[illegible]　文艸

[illegible]　素十

[illegible]　漁山

[illegible]　宋湖

[illegible]　能一

[illegible]　丈州

[illegible]　魚村

[illegible]　菊居

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』　請求記号 863-168
ガラス使用

新年の所

都貢

我も惜しこよひ来ましかれば

雨とかり又鳥を寵せし　曉臺

虎杖や葉に蔵り市行く　白圖

竹の葉あしの株まもらし　残長

早稲川三ッ四ッ姫川蓄の月　輪五

柚味噌の宝の庵もあらん　左丘

ウ掃かれ箒の先にきりくを　祖康

疲寺なりしも一之　崔峩

口遠よしく山又ハ海をく　史川

下略

かくいさ年しきれ遠ふかしも

別れを告れ折にかれて

同よ年しきまし餞けて忘れから　輪五

山川とりしく返し又ハ　残長

時をくこかり山さく道をなく　左丘

其のワクれ志のふれ星りなりし身　羅紅

きれのみちに恙とやいふ時もなし　甫丘

おとしてふ塩や踏らむ濱橋　崔峩

師の手引を各鳴海の澤まで
志ひてまた橋なり井のまゝれおら
こゝ風の貴し素琴に笑の
根の永きりがおしむて深生
十六日あらし葉月の志ふ心
まゝこんとて行し給へる

給ひ　おく秋雲し海と花に月　祖康

芳しの芽やまゝ待ちとて鳴海浮　史川

歌仙行

門をまゝ松かりしたれ
師をまゝ花の席にむ之れ三盃をあらむ　鳳荷

蓬萊や折りぬれ見胡桃

出ならふ門より松の朝晴　曉臺

小こりけに木の志ら雪流れまて　滿呂

をそれ鶴の何なるゝ　寸虹

蛩掃しく志まへる月のちりかゝり　一葉

負けしきれ踊ることれ　卧央

帆ウ手く寒くさ鳥以相感ても　待充
小園一の此雲縁とゝる　午晁

下略

なりけしむまや呂のみちのおく　一桑
苗挂くおちよき菓の秋さん　待充
きよらや雲は志明りに夏の空　寸虹
星れなよ花は稲も祈る日ハ　卧央

兼ひ庭掛しも雅らしけれ　満呂
師の来りしに此の行
おりなりしれにさらん事の
行りく
けれなしや宿に庫ありて花りれ　午晁

亦紀行

名にしあれば果しかれ逸士
墨宝むかしくしいとよそのを
にしくよそおひ遂れもかし
茲より年れ片心なる志を
速に神の掛てあれそのそ
曉先生なりなる徒一日拓の峯
柳の口の事を逸手星行健う
なる事事の祈りしく

謝大

片心をしてやふれ雲にふる
霧をつかれ出て朝よ出 曉臺
ゆれそ行の士拓も古来名に唱て 笳涼

杖をこし給に思本眞ふこ 李半
何事なれ給ふれて物ワまれ 榮呂
経しの数れ入トぬ隅まく 近試
ウ
明りまへを調音にたれ是れ月 五洲
きそりて柳ちられ仕私 六亀

卜略

きふ来るに呆たれぬ旅を八重霞　笳涼
春のりもたしまやおもむ夏の旅　榮呂
まる心あれりしまも朝寒こそ　李半
往来かもきゆ冬の雪波の月　六亀
笑ひも笠に志しのや杖の跡　令木
寒一計敬てそ意し朝霞　近試
二夏里れ往まれて寒の春　五洲

歌僊行　狙乃

冬に其の浴もあるなら旅現
角ふもなし寒の戸垣　暁臺
おかもなれ旅りし挿貝ぬれ重く　五風
袖ぬらしら振てそれなり　涼左
笑子粒も拾ひれやらの罠　佳木
然ひ花されうし羅の中道　八車

卜昭

月に唐川に仕合し井の秋　涼左
寒かりけるの山風沖嵐　五風
えもやまや肩かさしく物雲雀　八車
拾ひ付れて雨に鶴の川まれ　佳木

歌仙

武旦

梅さきに松しほかけくらの笠
笠着くるもいさかも翁姫　暁臺
鶯屑なる掃ひて門に鎌ひて　風芝
深れ吐息なほ川を吹きり　魯玖
沈きりしを晴命し十三夜　里棠
卅和寒ありけるをよみ　黄　苜戸
天王れ軒さきけし起出旅町　乙伍

定川なら傘の猪　素藍

下略

道先やんれまらにはれの風　乙伍

[illegible]　里棠

松崎やそとりくも道をうし　素藍

駒志まし歌まんきん柳陰　昔戸

笠れ鶴に雲雀さけれ朝夕水　魯玖

[illegible]　鳳芝

歌仙行　何曲

海川をいさみ明るを山ちさ

やれかりかりの雲に入よく　暁臺

まるかれ菜れ子に細の秋捻事　里暁

[illegible]　楚菊

[illegible]又もさしの[illegible]浅茅に深やより　野来
りの山見るに[illegible]帆[illegible]　撓尺

下略

柳折を門の喝立そしし　里暁
鍵ゆるれ引来や[illegible]の折り所　撓尺
[illegible]おもひやりて柳[illegible]　野来
菜れ[illegible]祈し早[illegible]や朝日[illegible]　楚菊

十

三列矢作
柏壽庵連中

歌仙行

曽[illegible]
蕉翁の杖を助し[illegible]
師[illegible]
いつも世話の[illegible]　千久婦

利[illegible]　[illegible]世[illegible]に[illegible]
[illegible]　鍵の[illegible]　暁堂
[illegible]　[illegible]　朱蒼
[illegible]　[illegible]　麦圃
[illegible]　焦尾

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』　請求記号 863-168
ガラス使用

下略

浅水のかつてちらし治の月農中
てりおし入んて神は応雲に
齢を舌師をなつく

為きみてえそやを伸りく汁　蕉尾

別情半ハあらん笠川の流を
きこしめさく

わかれても又よれ風れ柳かな　麦甫

来川の別ことをきさんてえ矢作川の
ほとりに忍とりあけてえ仲秋
にこ以あらにれんとく

月やくるを橋さくもし別れ哉　朱菩

霜にこめし芭蕉翁をおなれしは
千ゝ柄ある日に一夜もとゞて帰
路をと流し人の秋風かなし

日馬ゑそきれしおかけろよ橋皇　千久郎

哥僊行

三州岡崎
江湖庵連中

月とやふれおしたる痕哉　入素

きみれの名の歌のを衣ほきをし　暁臺

末地枕も今(レウブ)法にそちと喰ひ飽く　雪巣
眠りこそしにたれ龍宮にし　春媒
帳ぶそ稲も取りれ飾　洽　竹也
繰りの如れ也思ひれ　雨　越鳧
怖(ウヲト)されて百物語逢ひ　帛荊
鼓向も網所場の物豆腐　六兎
そ時に筆の御りの霜霞ひ　北固
見ほて蒼れ也十月もなし　麦洗

万照

杖志ましほも笠思く柳浩　竹也
松山やよし蔵浩そ鼓ひ　帛荊
杖とそ飾ほ絵や其の山　北固
飾し書ふそ月の鼓をし　春媒
雑子の声この喝にちかしかり　程作
撫に和れりは拾折ふむ薄薄　少年　阿玖

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』　請求記号 863-168
ガラス使用

見ぬ鶴も志ましれらぬ花の月　六兎

され同さ笠かりくる花景　麦洗

ぬのかしにまさまから梅の星と庵　雪巣

笠雨先生一流の一農に於ける
多里を雲あり　たい言ひ
風流なし他を感せしむれ
年なりまし　ハ

おくせりし見ぬれおもし　花の中　趙息

さりけれ此花さの見ゆれと　中垣内　爲舟

末をこ友ひ弟種者風の鍱　同　松有

雪ぬ姉れ旅も掛に寝りし　同　雨崔

奇仙行　起　勿一庵連中　艸也

はそ道もせりし霞のおくハさを
よし　まむ屋舟　鶴も飾け　曉臺

遠見月明の鮎釣を帰れしを　帆路

汲んで星しかり新瓶次年に　蓑扑

夜そのもやれ物も分き世の安佐　秋千

詰てそおれと星に一振　葉月

下略

三里に灸すやれより松島の月
まり心にかゝりてと祖翁の宣る
もむつかるな師善雲又志そり

雲にはやはれ先へおくの雲　蓑扑

かゝるりや心なきもの雲かきと　葉月

掛そ此上の巾にかほりて万里
れ杖をもかゝしせそ先生
おそらく

寺よりけなり雲の旅　帆路

まけ入くまゝせ歩けより夏の花　秋千

歌仙行　尾横須賀連中

よ寄物とかつくすまたまへ笠の鍱　摩手三

きちりきちりに茶の下ゐ　暁臺

勝くはも二日は雲にきくそう　楓京

蕊は追く居れ家に仮纏り　如東

一ゆ此次座中ゆゑはゆゑ氏なりし　野乙

ゆ殿の其婦り見れを土作り絵　徐堂

ウ出て行せは雨や添りはらくれ　寉郎

蓮のさかりに私をうくて　以琴

ゑ中に同朋ゑとり男きれ　芦汀

ゑよ唯とりしチぬ後て恐ろ　梅甫

ほれ出ゑ後に熟拂の落る者　逸之

てうひ是はもそう寺山の井　烏喬

う寺人ゑうみ心に本仰りそう　錦左

読すきれ候(カ子)狼はそゑ白　几梅

弑楽ゑ笛も云やすと川むこ　茶朝

法房まくなるも古譜を入りし　發兎

下略

千里行縢や松ゝ始りより　方同令　楓京

役ゆん東風おりくに花の夏　逸之

月花は夜ありおくの果とも　几梅

松の風を行しかて酔ぬ首途の日　以琴

地の風をぬれぬれ雨の歩行濡り　茶朝

日ゝ道のゆうりや桃しのかしまし　芦汀

一かまつ深かくおくり一里山　梅甫

見おくりくいさ君桃しの名も同ん　錦龙

秋をまゝ葉の風まかん雲の見　烏喬

云の葉は家つとも此ゆに秋行ぬ　如東

かされ身に糸をかくしたる口歌　カキロ　寉郎

あらくれ　関ゆへ結へ其の風　寺本　徐堂

さきかしかゝ見惡して　同　野乙

五孫

行鞍やまくまつ川に霞む笠　去角

山吹やつかなく笠のあつ、隠　文樵

ちるかれ川送るれつ風の柳汁　季計

孫蒸れ役りまそいさるかる　星夕

春の余波鞍りそひつこと　等先

柳。橋おろされ宵やふらせん　呂山

永きりや西に富士見るかのりを　岱青

青々星鉛きやうしの旅　慶之

見ゆれを鶴りぬりし紙子の寄　護竹

お出照

鶴の巻ばかりてやふれ電つひ　木吾

前書照

蒜につかれ又まれ屋の時や待つ　竹支

お出照

旅ぬ芝山の持姫の中行を　鷗沙

新紀行

白圖

花の雪ワけ入れ春への松山や
春勝勝也心ほそくも　曉臺
地獄ゆゑ蜘も糸引くた蔵　是誰
狐の山所也人そいふなり　蠻年

下略

下ハも青夷の笠に花の雪　是誰
見ゆれや霞くて呆し分れ　蠻年

破柳

竹林下

此ワれ添明らうに柳ちりし　萬中
思ひしぬ一蓋をむすれなかけ
せしも雨なかれ花をまけのこ
かとこそ到とかゝまておかひ
かけそふり撓をしまめて雪の笠　事紅
柳くに道を　髮　筋　曉臺

14252

父母在世時そこなくなれハすとなるにハ
教の道なりし業のうち蓮の矢ハ
四方の志おれりしかも海を記新るハ
親ならんや家民間の旅ハしを
かワ四方子に旅させよと以ふを
又有より善雨巻に一人の母おれ
かしも親健にしく熱朴なし
況やたまえん婦の身あり志遠
の遠相河の罷かおらむ行矣
暁豊子秋のれを立帰りて
見し海山のおりてりに老れ
庫見なくさめハ老年風車
のおほしりを似もよれへりとれと

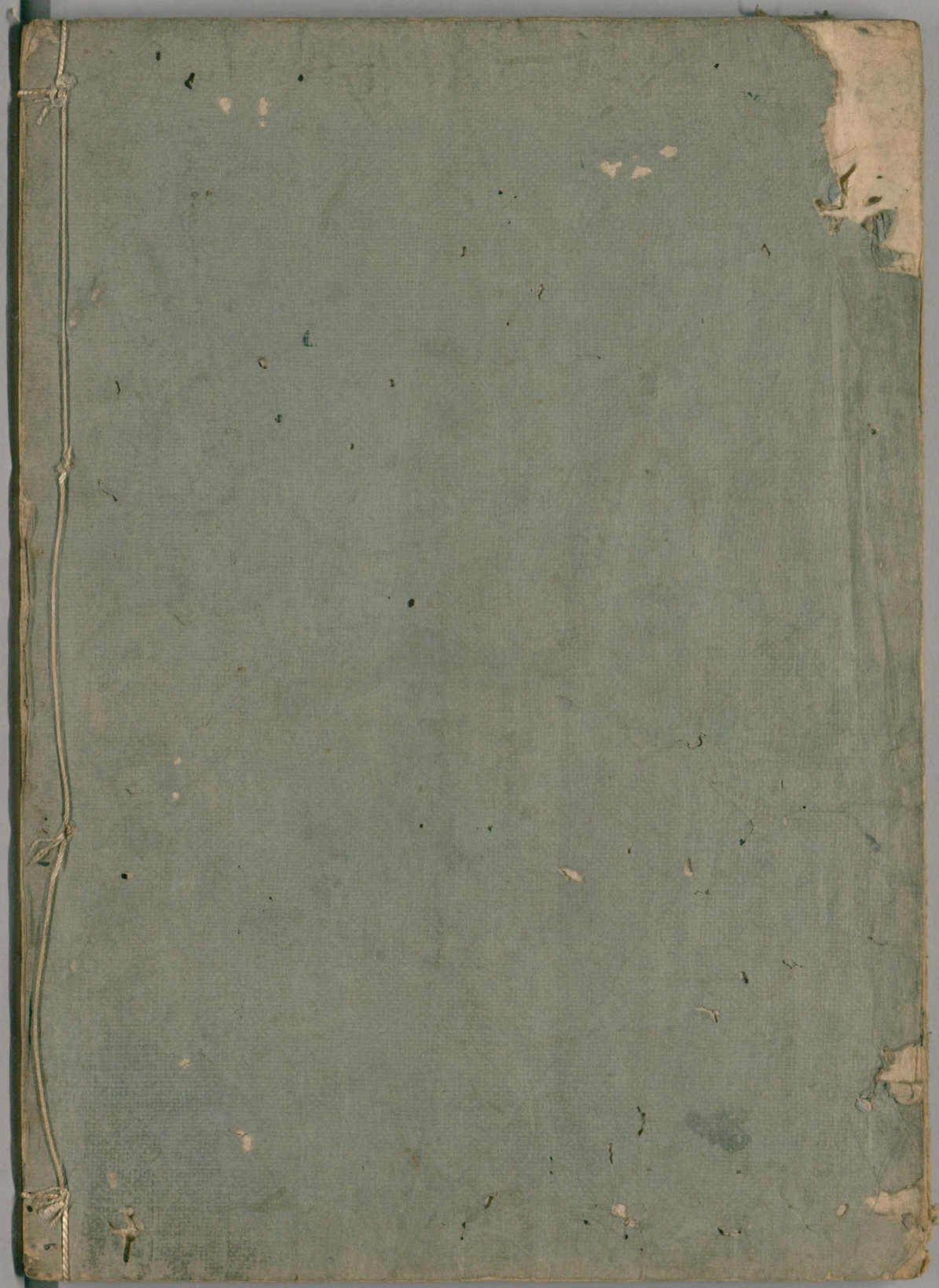
一夜坐に鄙孟を勧て
そ途を見えたりも語の山川
生なく特に生まれ松島の佳
境へおら海しの日数なりハ
到る世事なく笑しく一句なし
彼柳の一枝ハ代ふ　半掃庵
也有

見立ハ　塩ノ白橋　暁に今ハ
霞を踏りたこふ　朝風　暁臺
鍱くに狩衣のなり事れ入れ　事紅

京橘治梓

863
168

国立国会図書館　タイトル『しをり萩』　請求記号 863-168
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『しをり萩』 請求記号 863-168

ガラス使用